

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013  
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2013年(平成25年)6月16日 日曜日

無料

## 第13号

毎月発行

創刊2013年(平成25年)6月16日 日曜日



新緑の山々と湖

### 東北の魅力を掘り起こす旅 岩手・北上市 郷土芸能と手つかずの自然と秘境温泉 そこでは新しい東北像が発掘を待っている

#### 念願の北上訪問

六月二日朝、東北新幹線・北上駅に降り立つ。駅で待ち合わせたのは、春日流八幡鹿踊保存会・中立(なかだち)の藤原敏也氏、そして郷土芸能好きが高じて北上に移住したというまつもとけいこ氏のお二人。前から訪問しようと思っていたがこの日やっと実現した。藤原氏には都内で一度お目にかかって今度が二度目。まつもと氏は、以前記事執筆していただいたことがあるが、今回が初対面。それなのに図々しくも、北上を訪問したい、案内して欲しい、行きたいところもあるとまことに身勝手な引率のお願いをした次第。大体のスケジュールは分かっているが、秘密の部分があり、それが明らかにな

るのも楽しみであった。宮城北部・岩手南部が新たな東北発掘地

以前から、東北の歴史と東北の新たな魅力の掘り起こしにあたって、宮城北部から岩手南部地域一帯は鍵を握る地域と思っていた。加えて、宮城北部の田舎育ちの筆者は、この地域はとも落ち着く。長い歴史をくぐり抜けた「空気を」共有できる。それで、ここを掘り起こすのは自己の内なる「東北」を掘り起こすことでもあると思っ



岩崎城 絵幟

この地域の歴史というところまずアテイルが出てくるが、アテイルは、ほんの入り口である。その前のアザマロ。いやもつともつと遡って、たたら製鉄の時代、大量移民の時代、さらに遡って弥生時代の興亡、縄文

東北人も気づかぬ東北の魅力

東北人はほんとうに東北の魅力を知っているだろうか。良く知らないのではなか。最近素朴に抱く疑問である。あまりにも歴史が埋没しすぎていると思うのだ。前述のアテイルにしてもようやく最近注目される



和賀大乘神楽 荒神 三つ目

ようになったが、それ以前のことなど、ほぼ未発掘状態で埋もれたまま。それで、不幸な出来事であった震災を契機として、むしろ、これまでの東北を見つめ直し、知らなかったことを発掘し、それをつなぎ合わせて、東北なるものを再構築する。その旗印のもとで復興活動を組織化する。そうした復興活動があっても良いと思うのだ。今回の北上ミニ旅の目的のひとつはそれであった。

#### 岩崎城跡で 和賀氏供養

この日はちょうど第三一回岩崎城絵幟(えのぼり)まつりが市内の岩崎城址で開催された。室町時代を境にして四〇〇年間この地を支配していた和賀氏の供養祭があり、供養塔の前で、この地方の鬼剣舞のルーツともいうべき「岩崎鬼剣舞保存会」の奉納演舞があった。本場の鬼剣舞を見たのは初めてであったが、力強くエネルギーが伝わった。震災後の建設の舞楽殿では和賀大乘神楽が演じられ



鬼の館



岩崎鬼剣舞



お世話になっております



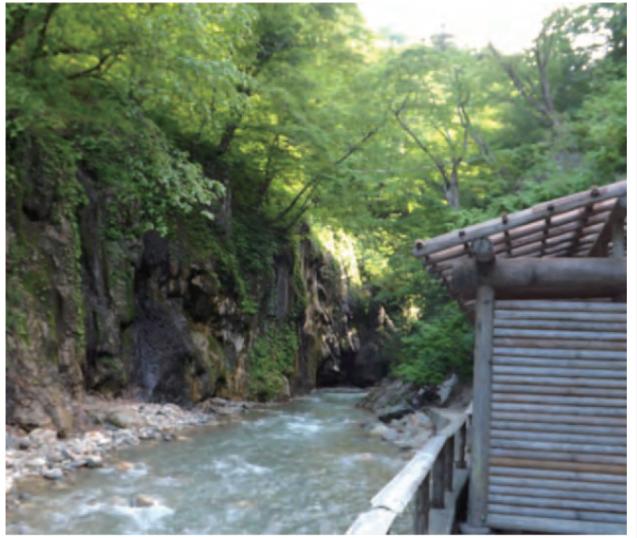
悪路王



悪霊退散



供養碑の前で



一番熱い風呂と溪流

ちょうどそこに、当新聞が毎号掲載している動画を拝借している東北文化財映像研究所・所長の阿部武司氏もお会いになっており、初めてお会いすることができた。バーチャルな人間の結びつきが現実化していく。

### 岩崎鬼剣舞

剣舞(けんばい)は岩手県から宮城県にかけて分布する代表的な民俗芸能のひとつだが、なかでも忿怒の形相の仮面をかぶって踊る剣舞を鬼剣舞(おにけんばい)という。悪霊を踏み鎮める呪法のひとつとして注目されてきた反閨(へんばい)の影響を受けているという説もある。

この反閨のルーツも興味深い。諸説あるが、独特の歩行が修験道の鎮魂の呪術のひとつであるとか、陰陽道で用いられる呪術的歩行のひとつで、大地を踏み



雪溪の山々と湖

悪魔を踏み鎮め、場の気を整えて清浄にする目的で行われる舞いの要素があるとか、念仏によって御霊や怨霊を往生させて災厄を防ぐ浄土教由来の信仰的要素があると、いかいしたものである。いずれにしても歴史はかなり古いようだ。現代でいえば、相撲の四股、歌舞伎の足の踏み鳴らし、能のすり足のルーツとも言われている。

### 村崎野大乗神楽

以前にも記載したが、筆者の故郷である宮城・遠田郡涌谷町・鏡岳(ののだけ)にある鏡峯寺(こんぼうじ)にはかつて大乗神楽があったが、江戸時代に廃れた。廃れる前に、北上の村崎野大乗神楽として継承されたという言い伝えがある。その意味で、ここにとっても強いつながりを感じる。いつか、鏡岳の鏡峯寺にこの神楽をお呼びしたいものだ。

### 和賀大乗神楽「荒神」

大乗神楽とは、岩手県の旧和賀地方に分布し、修験道の祈禱色の濃い神楽である。和賀山伏神楽と称されることもある。また大乗神楽は本地垂迹説を基とした神仏混淆で、他の山伏神楽にない神秘的な雰囲気を感じさせる。岩手県内では、北上市の和賀大乗神楽、村崎野大乗神楽、道の上山伏神楽、花巻市の北笹間山伏

### 鬼の館で鬼剣舞

最近「鬼」に興味がある。以前「鬼」を調べていたら、ここの「鬼の館」にたどり着いた。それで無理にお願いして連れてきていただいた。

秘境であり、地元の人でも道に迷ったら大変なことになると聞いた。曲がりくねった細い道を大分登ってようやく夏油(げとう)温泉に到着。温泉名の判明。さっそく温泉に入る。ところが、最初に入った場所はとても熱い。五〇度に近い。慣らしてから入ろうと、足湯を試みたが、やけどしそうな熱さ。桶で湯を汲み、少しずつ慣らす。勇気を出して首まで浸かる。三〇秒と持たない。でも何度かトライ。熱すぎる。その後、露天風呂に入ると、こちらは一転ぬるい。高温の湯に浸かり緊張した体の隅々が一挙に伸びた。毛細血管まで。でもまた訪れたい温泉だ。

### 新たな観光資源発見

温泉からの帰り、ダム湖に立ち寄った。そこからの景色がすばらしい。新緑に

### 秘境の温泉

鬼の館から秘境の温泉に移動する。まだ行き先は聞いていない。どんだん山奥に入り込む。近くの谷や遠くの山には雪渓もたくさん残っている。そこは本当に

### 夏油温泉

遠くの方々の雪渓、湖の水の青が、えもいわれぬ風景を形成している。絶景である。これを壊してはならない。観光地として擦り切れていない手つかずの自然。人に教えたいが教えたくもない景観。また行きたい。

### 春日流八幡鹿踊

この旅の締めくくりは、藤原氏の春日流八幡鹿踊を「展望台」で、太鼓を敲いて唄いながら踊って見せていただいたこと。独り占めならぬ、まつもとさんとの二人占め。なんとというぜいたく。藤原さんに大感謝。

たった一日の旅だったが、盛りだくさんの最高にぜいたくな旅であった。北上のとりこになりそうだ。花巻にもおじゃましなければならぬ。八月始めの北上のみちのく芸能まつりにおじやますることを約束した。



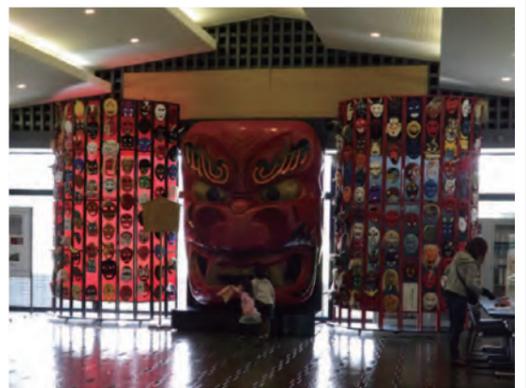
展望台で春日流八幡鹿踊独り占め



飛んでいる



滑田鬼剣舞



巨大な鬼の面



夏油温泉旅館



アクロバット舞



鬼剣舞後継者

# 東北六魂祭 6/1・2 福島開催 2日間で25万人

## 注目の福島開催

今年の「東北六魂祭」は六月一日、二日、福島での開催であった。一日早朝、東京の自宅を出て、始発電車を取り継ぎ福島を目指した。昨年の六魂祭盛岡開催



開会に先立ち全員黙禱

取材は、筆者の記者デビューでもあり、当新聞の創刊号記事でもあり、いろんな意味で今回の取材に力が入った。加えて、昨年の盛岡開催終了後に福島開催が正式に発表された時点から、福島開催はいろいろな意味でどうなるのかとても気になっていた。

第一点は、福島第一原発の問題を東北六魂祭として、どう位置づけ、どう乗り越えていくのか、という問題である。

次に、原発問題で経済的影響が出て、復興にも悪影響を与えているが、それを跳ね返す試みが、この六魂祭にどう反映されるのか。最後に、第三回を迎える東北六魂祭のあり方に何か変化をもたらすのかどうかという点であった。

## 福島の特徴

### 出し切れず

そうした意味で、大いにサプライズや変化が期待されていたが、残念ながらパレードなどは盛岡開催と変化なく、むしろパレードに参加した人数は減少したのではないかと感じられた。

また、土日で二五万人の人数と発表されたが、それほどの混乱は感じられなかった。ただし、トイレが異常に少なく、トイレ行列はどこもすさまじかった。

変化らしい変化といえど、航空自衛隊松島基地所属のブルーインパルスによる飛行が華を添えたことであろうか。拍子抜けするほど変化が見られなかった。あとは、当新聞第8号で取り上げた浅草の宮本卯之助商店で見たガレキの破片



今年のテーマは「福」

を組み上げて作った胸を用いた太鼓と思われる太鼓が開会式で使われたことだろうか。きっとあの太鼓に間違ったと思うが、まさかここで会えるとは思わなかった。縁とは不思議なものである。

## 東北の県庁所在地の 観光客収容人員

仙台開催での人数は二日間で約三十七万人、前回の盛岡は約二十四万人、今回が二五万人と発表されている。仙台では、周知のように、あまりの人数でパレードの一部が中止となった。

この福島の場合、祭の各会場では人があふれ、パレードがある道路の歩道は歩けないほどの混雑だった。しかし、大雑把にいうならば、東北各県の県庁所在地でも三〇万人が収容の

限界ということである。これを越えると、交通はマヒし、パレードもままならないということになる。

これは世界的観光都市を目指すのはむずかしいともいえる。もし東北各県がそれを目指すならば、この収容観光問題を何とかしなければならぬと感じた。

## 企業協賛金問題

福島開催が終了してすぐ、六魂祭への企業協賛金が大きく減少している

ため、来年の祭開催が危機を迎えるのではないかというニュースが出た。震災から二年が経過した影響がこんなところにも出ているようだ。しかし、経済効果は二〇―三〇億円という、費用が計画以上だったとはいえ、四千万円程度ならば何とかなるレベルの話で、

来年から中止する可能性があるという発表は納得がいかない。詳細な分析が必要であろう。

## 今回の六魂祭について

前述の企業協賛金はさておき、次回以降はこの祭のあり方を検討し直した方が良さし、それをせずに、盛岡・福島・山形とほぼ同様の形の六魂祭では、参加者も、観衆も、関係者も盛り上がるのはむずかしい。

この祭の意味を再度問い直して欲しいと願う。この祭を契機として復興に立ち上がろうとする被災者も必ずいる。これらの被災者が、厳しい状況のなかで何とか踏ん張ろう、負けてなるものか、そうした気持ちをますます掻き立てるような形を毎年毎年編み出して欲しいと願う。



ブルーインパルス



仙台七夕まつり



盛岡さんさ踊り



福島わらじまつり



青森ねぶた祭



山形花笠まつり



秋田竿燈まつり

# シシオドリ、海を渡る 行山流舞川鹿子躍、米国シアトルにて レクチャーとデモンストレーション挙 東北郷土芸能の海外PRの第一歩

舞川鹿子躍保存会  
(岩手県一関市)・公益社団  
法人全日本郷土芸能協会  
小岩秀太郎



観客の着付け体験



小岩秀太郎氏と佐藤裕夫氏

筆者は現在東京在住であるが、故郷一関市舞川地区に伝わる鹿踊(舞川では鹿子躍と表記)を小学校時代に習ったからというものの虜になり、現在に至るまで鹿踊に関連する調査や発信、講演やワークショップなど行ってきた。おかげで「鹿馬鹿」という称号まで戴き(?!)、鹿踊をベースに日本の郷土芸能の魅力発信やあり方を、様々な分野を巻き込みながら考え日々

活動している。そしてこの発信は突然ひとつの実を結ぶことになる。「鹿子躍を海外でやってほしい」というオファーである。  
四月二十五日から三〇日までの期間、行山流舞川鹿子躍保存会有志二名(小岩秀太郎・佐藤裕夫)はアメリカ合衆国シアトルに遠征し、レクチャー&デモンストレーション(レクデモ)を行った。国際交流基金の海外巡回写真展『東北―風土・人・くらし』が「第三八回シアトル桜祭」にあわせて開催されることを機に、東北文化を代表して生の鹿子躍(鹿踊とも表記される岩手県・宮城県に伝わる郷土芸能。本物の鹿角を付けた鹿頭をかぶり、背中にササラと呼ばれる御幣を背負い、腰に付けた太鼓を叩きながら、自ら躍り、歌う)を披露した。

舞川鹿子躍にとっては初めての海外。国内でのワークショップは経験があるが、日本人、中でも郷土芸能に興味のある人たちが対象の場合、解説を省いても理解してもらえぬやりにやがさがあった。しかし今回は海外、しかも全く知識のない人たちが相手。レクチャー内容、実演の方法、配布資料などを再構成し臨んだ。  
今回会場になったシアトル桜祭は日系人を中心に人種を越えたボランティアスタッフで開催してきた歴史ある祭りである。そこには

日本に対する深い愛情やノスタルジアが感じられ、また日本文化への深い関心を求めているものであった。この祭りに際し今回我々に課せられたのは、なんと三日間で怒涛の七回のレクデモ。一五kgの装束をほぼ一日中着用し、空き時間も会場を練り歩き、祭りを盛り上げた。  
鹿子躍は当然のことながらほとんどの人が観たことがなく、驚きをもって迎えられる。東北地方には三〇〇以上の郷土芸能が今も息づいていること、鹿子躍は本来男性しか躍れなかったのだが人口減少に伴い今は女性メンバー(夫婦や外部からの参加者)もいることを伝えると、会場からは賞賛の声も。東日本大震災被災地宮城県南三陸町の行山流水戸辺鹿子躍の復活を例に被災者の芸能に対する思いについても触れ(水戸辺鹿子躍は舞川鹿子躍の直系の元祖)、日本各地でなぜ多くの芸能が今もなお伝わっているのかを訴える機会を得た。伝承者自らが直に言葉を伝えることで距離が縮まり、日本の芸能により深く興味を持ってもらえたものと思う。

実演では「三人狂」という、男鹿が女鹿に力を見せつける演目を披露した。歌詞は逐次通訳、その後装束の解説をし一通りの理解をしてもらった後、観客の方に実際に着用してもらい、姿勢、躍り、太鼓などを段階的に体験してもらった時間も設けた。着付け体験は国内でも試したことがなく貴重な経験であった。  
後に聞いた感想では「躍りやビジュアルから超自然を感じる」「二人でも迫力があるのだから、八名だとどうなるんだ! Oh my god!」「観客参加型のパフォーマンスで楽しかった」「踊りの実演、由来、歴史の解説、ユーモアを交えた楽しい公演だった」「歌舞伎や相撲など、メジャーな伝統芸能以外の日本文化に触れられてよかった」「解説も配布資料もインフォーマティブだった」「鹿子躍は東北写真展とともに東北の魅力と粘り強さを伝える上で非常に有意義」などのコメントがあり、いずれも上々の反応だったようだ。また「鹿子躍は太鼓を腰につけて、躍りも躍って、歌も歌って、なんと合理的な芸能だろう」という合理主義国家アメリカならではの興味深い感想も寄せられた。  
短期間だったが、鹿子躍のビジュアルのみならず躍りや神秘性、そして三〇〇年もの間伝承されてきた意義を通して、鹿子躍の魅力を感じ取ってもらえたものと思う。これは、舞川という地域で鹿子躍を伝え続けてきた先人たちの努力と創造の賜物であり、保存会員、次代の伝承者(若手や子どもたち)、舞川地区民、ひいては郷土芸能に携わる人々たちにとって、誇りと期待、希望を持たせる機会になったのではない。  
筆者自身もおらが村のちっぽけな芸能が、海外の人々の驚嘆・共感を得ることができ、私たちが体に宿している郷土芸能という表現の重みと将来性を改めて確信したのであった。  
遠征チームのプロフィール  
小岩秀太郎  
(こいわ・しゅうたろう)  
一九七七年生まれ。岩手県一関市出身。公益社団法人全日本郷土芸能協会職員。小学校時代、郷土芸能「行山流舞川鹿子躍(ぎょうざりゅうまい)を伝承されおどり」を伝承され現在に至る。東日本大震災被災地の郷土芸能の復興支援に精力的に取り組んでいる。日本各地で鹿踊に関するワークショップを開催。

「問合せ先」 FB ページ <https://www.facebook.com/maikawashishiodori> 鹿子躍専用メール [maikawa.shishiodori@gmail.com](mailto:maikawa.shishiodori@gmail.com)



シアトル桜祭実行委員会、出演者の皆さん



全郷芸初代理事長 芳賀日出男氏の写真も展示



演目・三人狂のデモンストレーション

# 道州制に対する 根強い反対

## 前回、道州制を巡るこれ

までの動きを振り返ってみると、こうして見てみると、現在の都道府県をどうするかということについての議論は実に長い期間に亘って、何度も取り上げられてきていることが分かる。にも関わらず、いまだ具体的なアクションは起こっていないわけである。その背景には、道州制に関する反対意見が根強いことがある。

その代表的な意見は「道州になつて現在の都道府県がなくなると地方自治が住民から遠くなるのではないか」というものである。確かに一見、そのように見える。例えば、東北六県が一つの州となった場合、どこが州の中心になつても、それ以外の地域から見れば、現在の県庁所在地よりも明らかに遠くなることになる。ただ、ここで現在の四七都道府県になつた頃のことを考えてみたい。一八七一

年(明治四年)の廃藩置県から幾度かの変遷を経て四七都道府県となつたのは一八九〇年(明治二十三年)のことである。ちなみに、その前年の一八八九年に新橋神戸間の鉄道が開通している。この時の新橋神戸間の所要時間は驚くなれ下り二〇時間五分、上りで二〇時一〇分である。四七都道府県が定められたのはそのような時代だったのである。翻つて今、東京大阪間の所要時間はN700系「のぞみ」で二時間二分である。時間距離がおよそ一〇分の一近くにもなつている中、道州になつて多くの住民からの距離が遠くなるから自治も遠くなるという論も、そう単純に結び付けられる話ではないようにも思われる。

その前年の一八八九年に新橋神戸間の鉄道が開通している。この時の新橋神戸間の所要時間は驚くなれ下り二〇時間五分、上りで二〇時一〇分である。四七都道府県が定められたのはそのような時代だったのである。翻つて今、東京大阪間の所要時間はN700系「のぞみ」で二時間二分である。時間距離がおよそ一〇分の一近くにもなつている中、道州になつて多くの住民からの距離が遠くなるから自治も遠くなるという論も、そう単純に結び付けられる話ではないようにも思われる。

## 道州は「大きい」のか 「小さい」のか

今の都道府県から見ると、それらが集まってできている道州は確かに大きいように見える。しかし視点を転じてみるとどうか。もしそれが従来、国が担っていた権限を大きく移譲されてきたものだとして、ということである。その場合、道州はこれまでの国よりもはるかに小さく、身近なものになつていると言えるのではないだろうか。これま

方、権限を移譲させようとするれば、現在中央省庁の所掌事務を分掌する地方出先機関であるこれらの地方支分部局も、当然道州に統合されなければならないはずである。もし、これら地方支分部局がそのまま温存され、その一方で都道府県が道州となるような事態となれば、それは道州には何の権限も移譲されていない何よりの証左となる。

逆を言えば、地方支分部局が道州に統合されることになれば、道州にとつてこれほど心強いことはない。これまで都道府県は、各々のエリアの大きさで物事を考えていればよかったが、これからはその数倍の大きさのエリアで物事を考えていかなくてはならない。中央省庁の地方支分部局は、まさにこの道州のエリアの大きさでこれまでその職務を遂行してきた。その

つて州になることで行政機能が「州都」に集中し、それによって「州都」やその周辺の地価は上昇する一方、州都以外の都市では大幅な地価下落に見舞われるのではないかと不安視する声が出てきているのである。

現在でも県庁所在地と同じ県内の他地域の都市との格差は厳然としてある。道州制を導入した暁には、それと同様のことが、「州都」とそれ以外の現在の県庁所在地の間で起こるのではないかと、という懸念があるのである。

「東北州」実現の暁に「州都」と目されるのは、東北最大の人口を擁し、経済圏の規模も圧倒的に大きい仙台市だが、だからこそ決して仙台市を「州都」にしてはいけぬのである。首都ワシントンと最大都市ニューヨークを持つアメリカや、首都北京と最大都市上海を持つ中国に引くまでもなく、なぜ世界で少なくなるとも三〇以上の国と地域が首都と最大都市とを分け持っているかを考えれば、その理由は自明である。すなわち、政治の中核と経済の中核とを兼ねることによる首都への一極集中の弊害を避けるためである。

また、膨大な国の債務をどうするかという問題も、道州制の行方を大きく左右する。中央省庁はこう主張するに違いない。「国の債務のうちこれまで地方に回すために背負った分は地方で肩代わりしてほしい」。これは、ちょうど国鉄の分

割民営化の時の債務の処理を連想させる。あの時は三兆円に上る旧国鉄債務を、国が二・七兆円、分割民営化されたJR各社が一・四・五兆円引き受けるということになった。道州制で国の肩代わりをするのなら、権限だけでなく財源や借金もという議論は、今のところ出てきていないが、今後具体的な議論が行われる中で出てくる。中央省庁は、地方に権限を渡さないために、この問題を持ち出してくる可能性が高い。その時にどう対応するかで、まさに道州制の成否が決まると言っても過言ではない。肝心なのは、ここで各都道府県が、借金まで背負わされるくらいなら権限など持たなくてもよいという近視眼的な思考に陥らないようにすることである。四七都道府県になつて一〇年余りが経過した。今ここで考えるべきは、これからの一〇年を託すことのできる国の形、地方自治のあり方とはどのようなものなのかということである。それは決して、見た目ばかりの道州制ではないはずである。

「州都」だけではない  
難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

「州都」だけではない難しい問題

## 執筆者紹介

大友浩平  
(おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagmas/



大友浩平氏

Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

今後導入されようとする道州制が、権限移譲とセツトになつた実質を伴つたものか、それとも都道府県合併の表面を装う名前だけのものかを判断する端的な手掛かりは、中央省庁の地方支分部局の扱いである。地

「州都」

「州都」

「州都」

「州都」

「州都」

「州都」

連載 むかしばなし  
芭蕉のぼんばい  
第一話 無賃乗車の少年



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

昭和という時代が始まって、数年後のある春の日。岩手県遠野の娘・佐々木若葉は父・喜善とともに軽便鉄道に乗った。花巻の町で東北本線に乗り換えて、南の都市・仙臺へ向かうのだ。父娘揃って持病があつて、大きな町の病院でないと治療できないのでわざわざ遠方へ通院、という名目だった。父は遠野の村長だが、若い頃は東京

に出で文学などを目指し、とにかく都会が大好きだ。仙臺は東京よりずっと小さな町だが、東京でやった芝居や活動写真は全てやってくるという。華やかな市場に幟が無数に掲げられ、巨大な棚を持つ本屋もあり、最近では路面電車まで開通した。更に近々、音楽や講演を電波で遠くまで飛ばして家で聴ける、ラジオというものが仙臺にも始まり、何故か父・喜善にも参加のお声がかかっているのだが、どういう事になるのか父もよくわかっていないようだ。それより、何とんでもなく父の一番の楽しみは、この春中開催されているという、産業博覧会である。

博覧会というのは、昨今国中の都市で開かれている、何でも、世界でも最新の技術とか、世界中の物品や文化、珍しい動物や何かまで、大会場を設けて民間に開放する、途方もないお祭りのようだ。何だか想像がつかないが、いかにも新しい物好きの父を興奮させそうに催しではある。都会や新しい物に目がな

は昔から方々の人間が行き交い、いろいろな物語が伝えられてきた。正体のわからない、山人や動物、妖怪、不思議な旅。そんな話を、父は東京で偉い学者で文人の柳田国男という人に話して聞かせたところ、この人がそれを元に『遠野物語』という本を書いて、大変有名になってしまった。それが父の何にも勝る自慢だが、父は父で自分で本を書き、出版する努力を続けている。不思議な話が好きなのは、父自身がそういう存在を実際感じる能力があるからだ、と思う。物語を口で語る時の父の様子は尋常ではなく、娘でも恐ろしくなる程だ。そんな父が、村長などやっているのはひどく奇妙な事だが、これは父が東京の大学に行っていたからというので、村人達からと

てい。客車の影の上に、人の影も見えたの、と言うのだ。ほう、無賃乗車かね。上手く飛び乗ったものだね、と喜善は呑気に言った。トンネルでは真つ黒になるだろうが、覚悟の上での冒険だろうしね。いやいや、何か危険な輩かも知れませんが、車掌に通報しましょうか。そう言う純三に、皆必死なのです、今回の博覧会にしても、先の欧州大戦や震災から来る不景気を吹き飛ばそうというお上の苦肉の策ですから。自らの家計の深刻さにも重ねるように、しみじみと喜善は答えた。

行く手である南から雲行きが怪しくなってくる。どうも、稲妻も閃いているようだ。上の人、雷に打たれないかしら、と若が気遣いなどする。そのうちすつかり空が陰鬱になって、雨が強く降り出した。今純三は画板の方に気を戻して、鉛筆を走らせ始める。雷電というのがロストワールドという映画に出ていましたね、などと言いつつ、古生代の背びれや角や、長い首のある怪物を描いている。今は教師などしていませんが、挿絵でも何でも、筆と彫刀で食っていきたくて、何かの調査で仙臺まで来るといので、私も博覧会にかこつけて会いに行こうという訳です。

突然、若がハッと叫んで車窓から飛び退いた。お父さん、やはり上に誰か乗っている。客車の影の上に、人の影も見えたの、と言うのだ。ほう、無賃乗車かね。上手く飛び乗ったものだね、と喜善は呑気に言った。トンネルでは真つ黒になるだろうが、覚悟の上での冒険だろうしね。いやいや、何か危険な輩かも知れませんが、車掌に通報しましょうか。そう言う純三に、皆必死なのです、今回の博覧会にしても、先の欧州大戦や震災から来る不景気を吹き飛ばそうというお上の苦肉の策ですから。自らの家計の深刻さにも重ねるように、しみじみと喜善は答えた。

行く手である南から雲行きが怪しくなってくる。どうも、稲妻も閃いているようだ。上の人、雷に打たれないかしら、と若が気遣いなどする。そのうちすつかり空が陰鬱になって、雨が強く降り出した。今純三は画板の方に気を戻して、鉛筆を走らせ始める。雷電というのがロストワールドという映画に出ていましたね、などと言いつつ、古生代の背びれや角や、長い首のある怪物を描いている。今は教師などしていませんが、挿絵でも何でも、筆と彫刀で食っていきたくて、何かの調査で仙臺まで来るといので、私も博覧会にかこつけて会いに行こうという訳です。

落した、今度こそ落ちた、と純三は思った。前二両の客車の先にある、ハチロク型の機関車が、大量の蒸気を吹き出す音が聞こえてくる。汽車は完全に停止していた。身を起こした若が、随分霧が深いね、と言った。蒸気かと思つたら、確かに辺り一面の濃霧である。雨も、雷も止み、ひどく静かだ。ようやく、ドカドカと足音がして車掌が現れた。乗客達の困惑と抗議の視線を浴びながら、これもかなり動揺している様子で、皆様お怪我はございませんか。どうか落ちてお聞き下さい。せ、線路がありません。と、言った。乗客一同、数秒間声が出なかつた。雷で倒木でもあつたのかと思つたが、山崩れか何かで線路が寸断されたとしても言うのだからか。待って待って、多賀城も過ぎてもう少しで仙臺に着くところではなかつたか。気がつく、窓の外の霧の中を、彷徨うように歩く者がいる。何と、先程、今度こそ落ちた、無賃乗車の少年である。おい、君！と純三が声をかけると、こちらを見て、会釈した。マタギが着るような、カッポという上着や、袴、腰巾着を身につけて着ている。君は一体、どうなる一行！

次回予告：「仙臺を作る」一体この坊さん、何を企んでいるのか？次回、二〇万人の武装軍団が、鉄路を失った汽車に襲いかかる！？ どうなる一行！



土淵から見える早池峰山

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の山々」 遠野 1000 景より



雲海点景



遠野上空の雲海

## 山は巨大な自然時計

長寿になったとはいえず、人間の寿命はたかだか八〇年。あつという間の時間ではない。その短い人間の生命とは異なり、何万年、何十万年という長い間変わらずにどっしりと構えた山々は、季節の移り変わり、一日の時間の経過を、気が遠くなるほど長期間に亘り教えてくれる巨大な自然の時計のようなものである。

春は、雪が解け、すべての植物が芽吹き、いつせいに花が咲き始める。山は白から緑と花の色が混じる。生き物たちも目覚める。

夏は、緑はますます濃く、セミが鳴きトンボが飛ぶ。秋は栗やアケビなど木の実が山にあふれる。そして紅葉。赤や黄色の鮮やかな原色が山を覆う。

そして冬。生命活動も休止となり、色は失われ、白一色となる。



早池峰山と薬師岳

## 昔の時間

分刻みの正確な時間によって生活する習慣は、ごく最近の話で、時計で時間を計る習慣もここ百年内の変化した点からも、かつての

日々の変化も、夜明けが近づくとも山の稜線が赤く染まり、一日が始まる。日が昇り、そして沈む。

天気によっても山の景色は変わる。晴れ、曇り、雨、嵐時には自然の妙ともいえるべき神秘的な雲海の発生という現象も現れる。

でも山は動かない。

## 山々への信仰

また、山々は山菜や木の実などの自然の恵みも与えてくれる。山の様子をつぶさに見ていけば、その年の収穫の出来・不出来までも予測可能だ。

東北は米どころといわれているが、そうなるから歴史は浅い。近年の考古学の成果で、稲作の開始は早いことが分かったが、主食になったのはずっと後であり、それまでの主食は木の実や米以外の穀類の採集であり栽培であった。そうした点からも、かつての

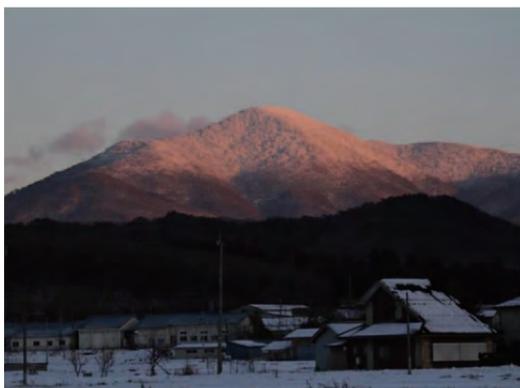
## 先祖の山、神の住む山

山々は、里の生活にとってなくてはならない存在だったのだ。

お社と遠くの雪をいたたく山々がいっしょに写った写真は何か郷愁を感じさせる。山々はきつと信心にも関わりが深いのだろう。

かつて里の人間が亡くなったあと、魂はすぐに天に召されるのではなく、近くの山々に一時的に移動し、残して来た人々を見守るといふ説を唱える人もいた。そして一部の山岳信仰にあるように、死後、徐々に高い山に移動していき、最後は天に昇り、新たな生命として転生するという説である。この説であれば、身近な人間の死は悲しいが、決定的な別れではなかったというものである。

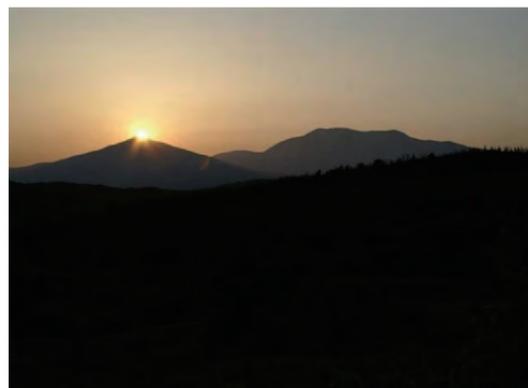
これだけ里の人間の生活に密接な関わりを持つ山々の存在は大きい。現代の山の意味とはかけ離れている。いずれがよいのだろうか。



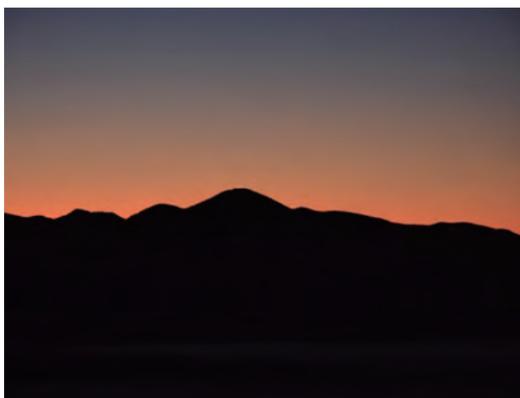
夕日に染まる六角牛山



雪中お社 上郷にて



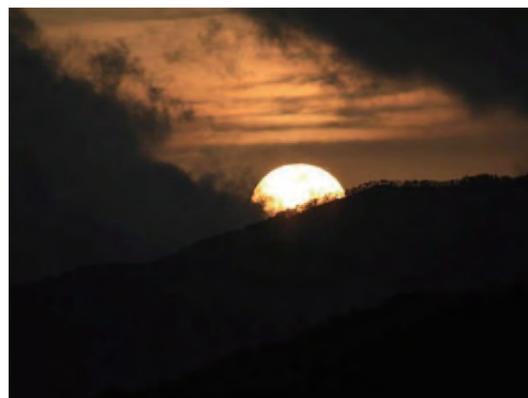
落陽



夜明けの六角牛山



田中のお社



日没 八幡より

# 東北ビール紀行

## その①(全7回)

### 第1回東北とビールの浅からぬ関係

#### 東北でビール?

東北でアルコールと言えば、「日本酒」のイメージが強い。確かに、「米どころは酒処」、手元にあるデータはちよつと前のものだが、全国には一七〇九の酒蔵があり、そのうち東北六県には二五三の酒蔵がある。全国の約一五%の酒蔵が東北にあるわけである。これらの酒蔵が作る東北の地酒は、日本酒好きにとっても評価の高いものが多い。しかし、東北のアルコールは決して地酒だけではない。実は、東北はビールと縁が深い(さらに言えばワインでもある)。ビールに欠かせないホップの国内生産は、東北六県で全国の何と九八%を占めるのである。そうしたこともあって、全国には現在二〇八の



仙台でのアウトバーフェストの様相

地ビール醸造所があることされるが、東北にはこのうち少なくとも二一の醸造所がある。

なぜ東北でこれだけのホップが生産できるかと言うと、そもそも東北はホップの栽培に適した気候らしい。ホップの近縁種であるカラハナソウ(唐花草)が、東北には多く自生しているのもそのことを示している。東北の地ビールの中には、この野生のカラハナソウをホップの代わりに用いたものもある。もともと、国内大手のビールは、東北で栽培されるホップだけでは到底足りず、使用するホップの大部分をドイツ、チェコ、アメリカなどからの輸入に頼っているという現実もある。ただ、それでも東北で取れたホップを味わえる機会がある。キリンやサッポロは毎年秋に、東北で取れたホップだけを使ったビールを出している。飲んでみると、いつも飲んでいるものとは違う味わいがある。ホップによってビールの味が変わることがよく分かる。しかしこれらの東北産ホップのビールも、そもそも限定生産なと人気が高いのと、いつも年が変わる前くらいにはなくなってしまう。これも、東北とビールのつながりを感じさせる一コマである。

#### 地ビールが飲める店とイベント

東北の地ビールもそれぞれ個性がある。次回から東北六県の地ビールを県別に紹介していこうと思うが、これから東北各地に足を運んだ際は、ぜひ地酒だけでなく地ビールにも目を向けてみることをお勧めしたい。その土地の料理との相性もバツチリである。この地ビール、醸造所が持っている直営のレストランなどを味わえる他、一般の飲食店でも取り扱っていることがある。その辺りの情報は、各地ビール醸造所のサイトで確認できる。また、僭越ながら私個人のブログでも東北各地で見つけた地ビールが飲めるお店の情報を載せている([http://blog.livedoor.jp/anagnas/archives/cat\\_50003340.html](http://blog.livedoor.jp/anagnas/archives/cat_50003340.html))。さらに、これからの時期、東北各地でこうした地ビールが飲めるイベントが相次いで開催されるので、そこを訪れてみるのもよい。そうしたイベントでは大抵いろいろな土地のいろいろな種類の地ビールが味わえるので、飲み比べもできる。この号が出る六月一六日はちょうど、仙台市内で行われている「東北オクトーバーフェスト」と秋田市で行われている「東北地ビールフェスティバル」の最終日だが、これ以降も様々なイベントが企画されている。

一例を挙げると、七月二〇日(土)、二一日(日)は福島市で「ビアフェスふくしま」、八月二三日(金)〜二五日(日)は岩手県一関市で「全国地ビールフェスティバル」が、八月三一日(土)、九月一日(日)は秋田市で「クラフトビールフェスティバル」が、九月二三日(金)〜二五日(日)は仙台市で「仙台オクトーバーフェスト」が、九月二二日(土)〜二三日(月・祝)は盛岡市で「オクトーバーフェストINベアレン」が、一〇月二二日(土)〜二四日(月・祝)は秋田市内で「秋田オクトーバーフェスト」が開催される。これらはどれも会場に行けば東北の地ビールを始め、各地の地ビールが味わえるイベントである。それだけでなく、大抵地元のおいしい料理のお店も出店するのでさらに楽しい。



地ビールの飲み比べができる

に「美味しいビールを楽しむ会」を開催したり、盛岡市にある「ホテル東日本盛岡」のように、大手メーカーのビールだけでなく東北最大の出荷量を誇る地ビールである銀河高原ビールも飲めるビアホールを開催したりするところもある。

#### 成長を続ける地ビール

そもそも地ビールは、一九九四年の酒税法改正でビールの最低製造数量の基準が、二〇〇〇キログラムから六〇キログラムへと大幅に引き下げられたことで全国各地に誕生した経緯がある。その後、長引く不況の影響やそれに伴う低価格飲料の台頭などで撤退を余儀なくされる醸造所も相次いだ。最近ではプレミアムビールに対する認知度も年々高まり、勢いを増している。ビール市場全体が前年度割れを続ける中で、地ビールは全体で二〇一三年は約一〇%前後ずつ出荷量を拡大している。海外で行われるコンペティションで入賞する地ビールも相次いでおり、質の点でも既に世界で対等以上に渡り合えるものになっている。これを味わわない手はない。仕事・旅行などで東北を訪れた折にはぜひ、地ビールにも目を向けてほしいものである。

というわけで、今回はまず青森県内の地ビールについて紹介したいと思う。

## 牡蠣早むき選手権大会

東日本予選 / 全日本選手権  
東京タワーで5・26開催  
優勝者は2連覇

### 昨年より少ない参加者

昨年に続いて、牡蠣の早むき選手権が五月二六日、東京タワーで開催された。昨年と異なり、地方予選から全国大会選抜と二段階選抜となった。西日本予選はひと足早く開催されたが、東日本予選は、全国大会と同じ日の午前中に行われた。



参加者全員の記念撮影

昨年よりも来賓の数も増えていたが、西日本予選が別の日の開催であったためか、出場選手が大分少なくなった印象を受けた。さらに残念だったのは、東日本予選の参加者が少なかったのと、被災地である三陸沿岸部、なかでも宮城・岩手からの参加者がわずか一名であったことだ。昨年は選手の大半が被災地からの参加であったため、この大会が復興支援の色彩が非常に濃いイベントだったが、今年は大分様相が異なった。



熱戦の様相

また、昨年は被災地のカキ生産者の選手応援のため、大漁旗がたくさん持ち込まれて、応援もものすごく熱気で、あまりの応援のために選手の方がプレッシャーで緊張している場面を何度も見たが、今年は旗の持ち込みはゼロで、非常におとなしい応援となった。みな牡蠣の生産復興に忙しかつたのだろうか。あるいは、宮城県石巻で今年秋、復興フェスティバルがあり、そこでもカキ早むき選手権があるため、東京での参加を見送ったのかもしれない。予選会場には、宮城・石巻の選手も含めて九名が出場というニュースも一部に流れたので、期待が大きかっただけに、まことにさびしかった。

### 決勝戦は世界大会のカキ使用で苦戦

予選では真ガキが使用されたが、全国大会選抜では、本番のアイランド・ゴールウェイ州で行われる世界大会と同じ品種の牡蠣が使われた。選手は一樣に硬くてむくのが大分苦戦した模様であった。



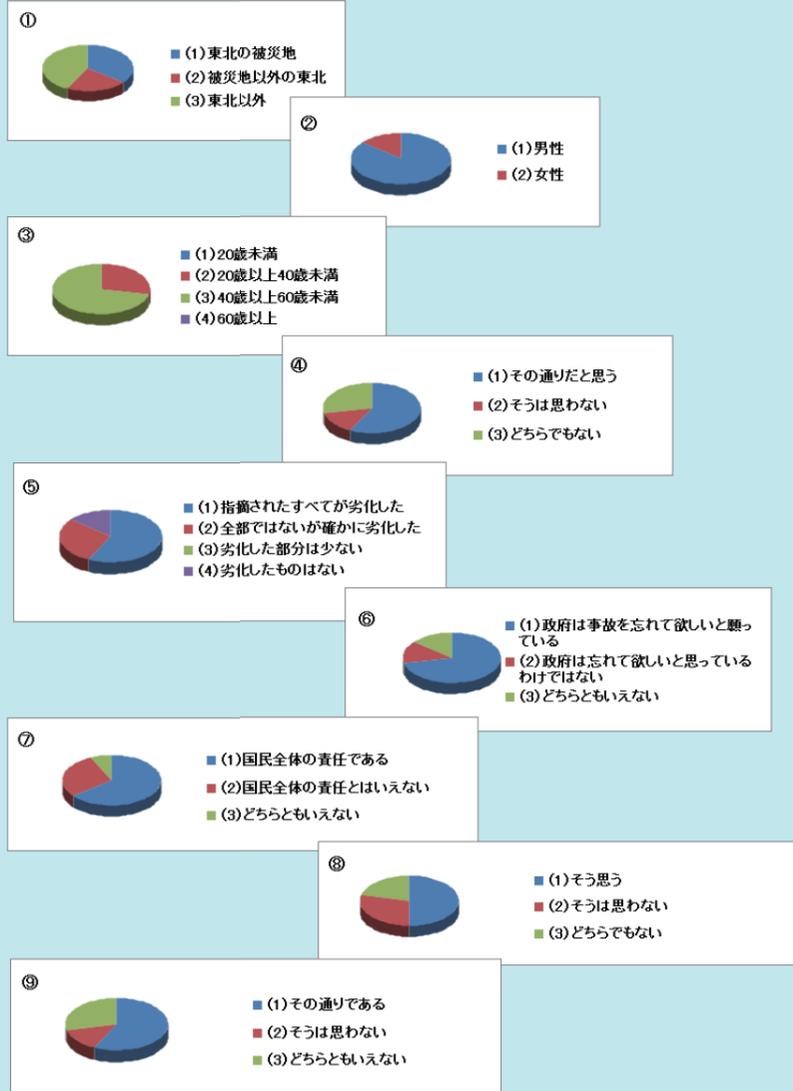
2連覇の優勝者インタビュー

今年優勝者は、昨年に続いて、オイスターバーに勤務する藤井司氏。西日本予選からの勝ち上がりであった。タイムは四分四秒で、本人も世界大会と同じ品種を経験済みなので、本意な結果であったようだ。なかにはむき終えるまで一〇分以上かかった選手もいた。選手は異口同音に「硬くてナイフがなかなか入らない」とぼやいていた。世界大会での優勝者タイムは二分台であり、かなりの開きがある。今回の優勝者である藤井氏は、今年九月末の世界大会に出場が決まっている。昨年は、初出場ということもあり、参加一七カ国中の最下位であったので、今回は最下位脱出はもろろん、上位進出を目指して欲しい。世界大会まではまだ時間がある。練習を重ね、何とかタイムを短縮して、世界大会で日本の存在をアピールして欲しいものだ。

## 第12号 ネットアンケート集計結果

### 【『東北論』(内田樹の研究室)の主張について その①】

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北の被災地	5
	(2) 被災地以外の東北	3
	(3) 東北以外	6
②	性別	
	(1) 男性	12
	(2) 女性	2
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	4
	(3) 40歳以上60歳未満	10
	(4) 60歳以上	0
④	被災地は見捨てられているか?	
	(1) その通りだと思う	8
	(2) そうは思わない	2
	(3) どちらでもない	4
⑤	この十数年で劣化したものは何か	
	(1) 指摘されたすべてが劣化した	8
	(2) 全部ではないが確かに劣化した	4
	(3) 劣化した部分は少ない	0
	(4) 劣化したものはない	2
⑥	原発事故の原因追求が進まないわけ	
	(1) 政府は事故を忘れて欲しいと願っている	10
	(2) 政府は忘れて欲しいと思っているわけではない	2
	(3) どちらともいえない	2
⑦	原発政策を支持してきた国民の責任	
	(1) 国民全体の責任である	9
	(2) 国民全体の責任とはいえない	4
	(3) どちらともいえない	1
⑧	全国的な被災地支援が盛り上がりがないわけ	
	(1) そう思う	7
	(2) そうは思わない	4
	(3) どちらでもない	3
⑨	日本人は問題を直視する意欲を失っているか	
	(1) その通りである	8
	(2) そうは思わない	2
	(3) どちらともいえない	4



今回の回答者数は一四名となりました。テーマは『東北論』(内田樹の研究室)の主張について、その①でした。日本の思想家、武道家、翻訳家、神戸女学院大学名誉教授・内田樹氏の東北の現状への発言に対するアンケートという新たな形式を採用しました。理由は、東北被災地についての氏の大胆な発言について考えることで、この問題に関する個々人の関り方を鋭くあぶり出したいと思ったからです。

被災地は見捨てられているかとの設問には、約57%がその通りと回答。この十数年で劣化したものは何かとの設問には約57%が、日本の統治機構、政治家と官僚と財界人とメディアのすべてが激しく劣化したと回答。原発事故の原因追求が進まないのは、約71%が政府は事故を忘れて欲しいと願っていると回答。原発政策を支持してきた国民の責任は、約64%が国民全体の責任としました。内田氏は、挙国一致的な東北被災地への支援体制が出来ない理由は、福島でいまだ何が起きているかを明らかにしないからだとするが、これに賛成はちょうど50%。残りはその思わないとどちらでもないに分かれた。日本人は問題を直視する意欲を失っているかについては、約57%がその通りと回答。厳しい内容であった。

今回の内容はまことに盛りだくさんであった。東北六魂祭記事もあつたし、その他の郷土芸能関連記事も多かった。なかでも北上へのミニ旅行に関する記事は、「郷土芸能旅」取材ともいえるほどぎっしりと郷土芸能が詰まっていた。

それを見て、そしていま振り返ってみて、あらためて感じたのは、東北の郷土芸能とは単なる郷土芸能ではなく、非常に土着的な宗教色が強いものであることである。仏教だ神道だ、修験道だとかいうようなジャンル分けがあまり意味をなさないような、もともと根源的な宗教心をベースにしているらしいことである。それらを強烈に感じ取った。

もっと細かく分析してみると、仏教伝来以前の昔、神道の組織化以前の道教や古代の修験道の時代、いやもっと遡って、縄文時代以来の素朴な宗教心、自然の山・川・木々・湖・海や自然現象、さらには人間や動物などの生死にまつわる大宇宙のドラマが何らかの形でこれらの郷土芸能に盛り込まれているのではないかと。それをひとつひとつ拾い上げていく作業は気の遠くなるような作業ではあるが、やるべき価値のある作業に思えてくる。どんどのめり込みそうになる自分を感じた次第であった。

### 編集後記

## 革物屋 (かわもんや) WEB完全リニューアル (WEBを移動しました)

<http://www.birthday-press.com/> (バースデイプレス) → 「小物のカテゴリー」 → 「レザー」

#### ミニバッグ Handy Second



持っていたくなる革バッグ。インナーバッグとしてもお使いいただけるセカンドバッグ。革は薄めの柔らかなものを使用し、手触り感を重視いたしました。内側は耐久性のある光沢ナイロン製布を使用。

#### ミニバッグ Tiny Dice



用途ご自由の四角いケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。

#### ミニバッグ Tiny Log



用途ご自由のまるいケース。重量40gと比較的軽量の製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバッグに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。

#### モバイルバッグ Beans L



レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Lは、その両方でご満足いただけるバッグです。

#### モバイルバッグ Beans S



レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バッグは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バッグはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバッグも多くはなかったようです。Beans Sは、その両方でご満足いただけるバッグです。

#### モバイルバッグ Handy Pouch



あなたにお供するポーチ。持ち運び可能で、デスクやテーブルに置いて開け閉めできるポーチ。上下蓋部分の内側にスポンジを挟み込んでおりますので、モバイル端末機器の付属品の収納にもお使いいただけます。